

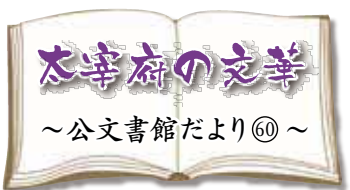
平安時代中期・後期の太宰府

日本史における時代の呼び名のひとつに平安時代があります。この平安時代とはいつからいつまでなのかという点について、わたくしは784年(長岡京遷都)～1185年(源頼朝による鎌倉政権の確立)と考えています。また日本史における時代区分に、原始・古代・中世・近世・近代・現代という分け方があります。これまで古代は、飛鳥時代・奈良時代・平安時代をいう、とされてきましたが、近年では、古代を平安時代中期(931年～1068年)までとし、中世を平安時代後期(1068年～1185年)からとする考え方が有力になっており、高校の日本史の教科書でもすでにこの時代区分が採用されています。

平安時代、とくに中期・後期に関する研究が充実してきたのは、ここ30年くらいのことといえます。それは、この時代を考えるための材料となる貴族の日記類などの史料が公刊されるなどして、広く共有されるようになったためです。その結果、平安時代中期・後期における政治や財政のあり方の変化もずいぶん明らかになってきました。たとえば中央政府の財政は平安時代中期に、調・庸といった地方からの税がなかなか納入されないという事態をうけて、

その収取システムが大きく変わっていくことになりました。

さて、この時代の太宰府についてまず想起されるのは、太宰府政庁跡第三期建物(の成立でしょう。それ以前にあった政庁跡第二期建物は941年、藤原純友によつて焼き討ちされますが、発掘調査の結果によつて、焼失からそれほど時を経ずして再建されたと考えられています。それと前後するようにいわゆる「府官層」



(太宰府の下級官人、おもに監・典およびその権官・代官)とされる人々の活躍が目立ち始めます。一方で、ほぼこの頃から太宰府の長官に公卿(三位以上の位階をもつ貴族)が任命されるようになったとの指摘もあります。また、財政的にみても、中央政府の収取システムの変化にともなつて太宰府財政のあり方も変わつていったと考えなければなりません。平安中期・後期における太宰府に関する研究は、いま述べたようにまったくないわけではありませんが、必ずしも多くないのが現状です。わたくしは、前述のような中央政府の動向を常に念頭に置きつつ、この時代の太宰府を検討してみることが必要だと考えています。